

「脱解体」する農耕詩～ロマン主義時代から Georgian Poetry へ

放送大学 大石 和欣

俗にいう「ジョージアン詩人」(Georgians)は、1911年から1922年にかけてEdward Marshが編集した*Georgian Poetry*に所収された詩人たちの総称である。Rupert Brooke, Siegfried Sassoon, Wilfred Owen, Edmund Blundenなど、彼らの内の何人かは戦争詩人(War Poets)でもあるが、「ジョージアン」という呼び名にはどこか侮蔑の響きが含まれてしまう。野の草花や動物、そしてイギリス的な田園の美しさを詠う彼らの詩は、見かけ上のナイーブさと逃避性ゆえに、同時代のモダニストから嘲笑を買うことになった。時にはさりげなくロマン派自然詩人Wordsworthに対する悪言も紛れこむ。たとえばT. S. Eliotは、1917年の*The Egoist*の記事において、ジョージアン詩人たちが観察する「動物、植物、あるいは暖炉の前の敷物」には、ドストエフスキーではなく、ワーズワスの「雰囲気」(mood)が漂うとその純朴さを見下す¹。そうしたジョージアン詩人とワーズワスの類推は、「雰囲気」という表現に凝縮されているように、言語やスタイルについての細かな分析に基づいたものであるというよりも、「なんとなく」といった漠然とした感覚的なもの、あるいは気分的なものに近い。

しかし、そんな読み方も第2次世界大戦後になると修正されるふしがある。大戦直後の1946年の*TLS*に掲載された匿名記事が興味深い。ジョージアン詩人たちが、Cowper、Thomson、Gray、Crabbeらの18世紀的な田園詩の系譜を汲んだ「イギリス的伝統の継承者」であり、より直接的にはワーズワスの血を引く「新しいロマン主義」であると主張する点は以前と変わらないが、第一次世界大戦という残虐な歴史的体験によって、彼らが「内的・知的な不安」に敏感になり、ワーズワス以上に「個人的で、より生々しい現実感」をもって自然を描いているという積極的な解釈を打ち出している。

More directly the Georgians have their roots in the Wordsworth tradition, but the new romanticism is on a broader basis; they are well aware of man and his doubts, spiritual and intellectual, with an awareness sharpened by the war. The Nature they appeal to is stronger and more realistic than Wordsworth dared to suggest, partly because the years between have threatened so much that Nature has become a more significant and permanent valuation of man's existence. They were anxious from the first to relate their comprehension of Nature with an intellectual, but sensitive, way of life that could deal with experience in simple thought and utterance.²

ワーズワスの描く自然に現実感がなかったという主張は議論の余地があろうが、ヴィクトリア朝後期に浸透した悲観的な世界観、そして戦争が惹起した実存的な疑念がジョージアン詩の自然描写の背後に横たわっているという指摘は極めて重い意味を持つ。二度

¹ T. S. Eliot, 'Reflections on Contemporary Poetry' in *The Egoist*, September 1917, pp. 118-19, as quoted in Timothy Rogers (ed.), *Georgian Poetry 1911-1922: The Critical Heritage* (London: Routledge and Kegan Paul, 1977), p. 181.

² *The Times Literary Supplement*, 16 March 1946, as quoted by Rogers (ed.), *Georgian Poetry*, p. 352.

目の世界大戦の惨禍を目撃した経験がそう言わせているのではなからうか。

例としてこの記事が掲げるのは Edmund Blunden の「羊飼い」(‘Shepherd’, 1922) である。朝露を振り払い牧場に向かい、日が暮れて疲れた体を引きずって家路につく羊飼いの日々の想いが、静かな田園風景の中に綴られる。イギリスの田園風景を愛し、傍観者的な自然描写も少なくないブランデンであるが、静かに忍びくる死の影を秋の黄昏や冬の寒空に感じる老羊飼いの姿は、けっして空疎な自然描写ではない。ジョージアン詩人の中で同じ趣向を示す詩を探すと、ブランデンの友人でもあったサスーンの「年老いた猟犬係」(‘The Old Huntsman’, 1917) にたどり着く。かつては地主に仕えた猟犬係が、騙されて貯蓄を失い、家庭も失い、過去への追憶の中で肉体的な衰えを嘆息する姿が劇的独白 (dramatic monologue) の形式で描かれる。田園詩という大きな範疇でくくってもいいが、生と死、労働と大地を見つめている点で二つの詩は農耕詩でもある。

ワーズワスがサスーンやブランデンの先祖であるとすれば、さらに踏み込んで「羊飼い」や「年老いた猟犬係」の祖父にあたるものをワーズワスの詩に求めることもできよう。‘Simon Lee’がそうではなからうか。サスーンの詩と同じく、かつては猟犬係だった主人公は年をとり、貧苦の中で肉体を酷使し続ける。この詩にも、働くこと、あるいは生きることそのものへの日常的かつ切実な問いかけがある。逃避の場としての牧歌的な自然は姿を消し、反牧歌的、いわば「墮落後」(post-lapsarian) の風景の中で労働の意味を再考する農耕詩の伝統が息づいている。それは 18 世紀までよく見られた冗長なまでの叙景や教訓に飾られた健康的な農耕詩の姿ではない。風化し、衰毫し、断片化した農耕生活がむき出しのまま投げ出されている。「羊飼い」であれ、「年老いた猟犬係」であれ、「サイモン・リー」であれ、決してそれぞれの詩人の代表的作品とは言えないが、そこには 19 世紀以降目立たなくなってしまう農耕詩の痕跡が残っているように思われる。それを考察することでロマン主義以降の農耕詩の変容の一端を垣間見ることができるのではなからうか。本論考は、「サイモン・リー」を中心としたワーズワスを農耕詩の枠組みの中で吟味し、ジョージアン詩を引き合いに出しながら、19 世紀以降解体されていった農耕詩のあり方について考えてみたい。

自然詩人としてのワーズワス研究は山ほどあるが、その多くは牧歌への言及こそすれ、意外にも農耕詩との関連性を見過ごしている。たしかに *Home at Grasmere* はもちろんのこと、*Descriptive Sketches*、*The Prelude* の 8 巻といった長詩、‘Tintern Abbey’、*Ruined Cottage*、‘Michael, a Pastoral Poem’ といった短詩や断片詩において、牧歌のイメージは常につきまとうし、*Lyrical Ballads* は 1802 年に ‘with Pastoral and Other Poems’ という副題さえ付与される。Jonathan Bate の *Romantic Ecology* (1991) も、「環境学」という斬新な現代的観点からワーズワスの自然観を読み直したが、牧歌に固執している点ではさして代わり映えがなかった。ワーズワスの自然は、貴族的な幻想としてのアルカディアや Pope に見られる新古典的な牧歌と峻別されつつも、「労働する楽園」(a working paradise) であり、羊飼いが「崇高な」存在になったロマン主義化された牧歌であると定義される。

The pastoral is removed from its traditional *locus amoenus* to a landscape such as men do live in. In terms of the distinction that was popularized by Edmund Burke, the aesthetic category of traditional pastoral is beautiful, while that of the Wordsworthian is the sublime. . . . [T]he purpose of book eight of *The Prelude* is not so much to show shepherds as they are but rather to bring forward an image of human greatness, to express faith in the perfectibility of mankind once institutions and hierarchies are removed and we are free,

enfranchised, and in an unmediated, unalienated relationship with nature. The radical humanism of book eight proposes the 'human form' as an index of delight, / Of grace and honour, power and worthiness' (414-16).³

ワーズワスの羊飼いが'wordsworthian or egotistical sublime'の権化であるというペイトの論旨は、結局のところロマン主義において牧歌は、愛ではなく自己を語る独我論的、ナルシズム的な世界に置き換わっていると指摘したRenato Polggioliの論の焼き直しと言えよう⁴。それを反駁するつもりはないし、ペイトも牧歌の政治的意義も無視しているわけではないが、田園生活そのもの、人間生活の根源的な要素である「労働」を見つめる農耕詩的視座は、彼の「エコ批評」において決定的に欠落しているように思う。

とはいえ「牧歌」と「農耕詩」にはジャンルとしての曖昧さがあり、区別には困難がともなう。そもそもウェルギリウス自身、『農耕詩』の最終行と『牧歌』の第一行目を重複させることで両者のジャンルの混交を助長しているようにさえ思われる。加えて海老澤豊氏が『田園の詩神』の中で無隅仔細に究明している通り、農耕詩は「猥雑な様式」であり、教訓、脱線、田園賛美、技術・科学礼賛といった装飾的要素をもつために、その定義は容易なものではない⁵。18世紀の農耕詩の伝統を精査したDwight L. Durlingは、*Descriptive Sketches*をはじめとするワーズワスの叙景詩を農耕詩の伝統的系譜の末裔に位置付ける⁶。だが、あえて本質論を言えば、黄金時代あるいはエデンやアルカディアという高度に虚構化された世界が広がる牧歌とは異なり、農耕詩は、エデンの園を追われた人間が行う生の営み、あるいは鉄の時代に忍耐と労働の価値を強調しつつも、より良い農耕生活への希望が暗示されている現世的な詩ということになる⁷。

ワーズワスの詩においても、湖水地方において生を営む人々の日々の労働、それが付与する自由の精神と威厳を論じようとするとき、自然の景色は農耕詩へと変質する。ペイトが牧歌的という『序曲』第8巻にも農耕詩の要素は混在している。

He feels himself,
In those vast regions where his service is,
A freeman, wedded to his life of hope
And hazard, and hard labour interchanged
With that majestic indolence so dear
To native man. (*The Prelude*, 8: 385-90)⁸

ウェルギリウスからPaul Valéryまでの牧歌に埋め込まれたイデオロギーを考察したAnnabel Pattersonも、ワーズワスの牧歌に「労働」という農耕詩の要素が紛れ込むことで、soft pastoralがhard pastoralに変質していると指摘する⁹。牧歌の範疇におけるhard

³ Jonathan Bate, *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (London: routledge, 1991), pp. 22, 28-29.

⁴ Bate, *Romantic Ecology*, p. 30; Renato Poggioli, *The Oaten Flute: Essays on Pastoral Poetry and the Pastoral Ideal* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975), p. 22.

⁵ 海老澤豊『田園の詩神』, pp. 11-12, 15, 22. John Chalker, *The English Georgic: A Study in the Development of a Form* (London: Routledge and Kegan Paul, 1969)も参照のこと。

⁶ Dwight L. Durling, *Georgic Tradition in English Poetry* (New York: Columbia UP, 1935), pp. 212-18.

⁷ Anthony Low, *The Georgic Revolution* (Princeton, N.J.: Princeton UP, 1985), p. 12.

⁸ William Wordsworth, *The Prelude 1799, 1805, 1850*, eds. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, Stephen Gill (New York: W. W. Norton, 1979), p. 286.

⁹ Annabel Patterson, *Pastoral and Ideology: Virgil to Valéry* (Berkeley: University of California Press, 1987), pp. 280-81.

pastoralは、Raymond Williamsがマルクス主義的な立場から定義した「反牧歌」(counter pastoral)と同じく、悪化した環境における労働をテーマに掲げる限りにおいて農耕詩と重なり合う¹⁰。「難儀な労働」が挿入された途端、ワーズワスの自然は突如として農耕詩に変貌するのだ。

ワーズワスと農耕詩の関係は必ずしも場当たりのものでもない。ケンブリッジ大学在学中の1788年の夏から1789年の夏にかけて、すでにウェルギリウスの『農耕詩』(Georgics)の翻訳を試みている¹¹。そもそも当時の学校教育においてウェルギリウスは、オヴィディウスやホメロスとともに子供たちが最初に出会う詩人の一人であり、その詩を英訳することでラテン語の修辞を学んでいったのだから、別段驚くことではないかもしれない。だが、後年(1823-24年)にAeneidの翻訳を真剣に試みたワーズワスが、ウェルギリウスの翻訳として最初に手をつけたのが『農耕詩』であったことは注目すべきことであろう。そこに故郷である湖水地方やイギリスの田園の風景を読み込んだ可能性もあるし、牧歌と並行して18世紀に盛況を極めたイギリスの農耕詩に刺激されたのかもしれない¹²。ワーズワスとウェルギリウスの翻訳を論じたBruce Graverは、古典を翻訳する慣習が英詩の言語を研ぎ澄ませ、豊かにしていったと指摘するが、ワーズワスは18世紀に大流行したイギリス的農耕詩を横目でみながら、ウェルギリウスの『農耕詩』を翻訳することで自らの詩的言語を構築していったと言えはしないだろうか¹³。実際にワーズワスは『農耕詩』を英訳するにあたって、John Drydenはもちろんのこと、John Martyn, Joseph Wartonの翻訳、さらにはGilbert Wakefieldの1788の訳を読んでいる。場合によってはCharles de la Rue, Jan MinelやLudovicus de la Cerdaの版も参照している可能性さえある¹⁴。

結果的にみると、ワーズワスの『農耕詩』翻訳は体系的なものではないし、18世紀的な農耕詩にもならなかったが、そのプロセスを通じて特殊かつ断片的な「農耕詩」の概念が形成されていった。コーネル版*Early Poems and Fragments, 1785-1797*に所収されているワーズワスの『農耕詩』訳には2系統あるが、いずれも断片に終わっている。一つは*Storm Fragments*といわれる嵐や風雨の風景を幾つか部分的に翻訳したものである。Thomsonの*The Seasons*にも組み込まれたウェルギリウスが描いた暴雨の風景を、自分の言葉に置き換えようという試みである。もう一方の翻訳も、さして、重要なものとは思われない箇所ばかりであるが、その中で唯一哲学的な省察を含んだものがある。『農耕詩』第3巻 iii. 66-8の箇所だ。これがワーズワスを農耕詩の伝統の中で考える際にきわめて重要な意味を持っている。ウェルギリウスの原典では、家畜に事寄せて、若く美しき時はいつしか過ぎ去り、病気と悲しみと苦しみがやってくるのだと、死を迎える肉体を憂う。

optima quaeque dies miseris mortalibus aevi
prima fugit; subeunt morbid tristisque senectus
et labor, et durae rapit inclementia mortis. (*Georgics*, 3: 66-68)¹⁵

¹⁰ Raymond Williams, *The Country and the City* (1973; London: Hogarth Press, 1985), pp. 13-34.

¹¹ Duncan Wu, 'Three Translations of Virgil Read by Wordsworth in 1788', *N&Q*, n.s. 37 (1990) 407-09; Duncan Wu, *Wordsworth's Reading 1770-1799* (Cambridge: Cambridge UP, 1993) p. 144.

¹² 『農耕詩』の第1巻と第3巻は、ワーズワスが入学した翌年から大学の指定教科書になった。William Wordsworth, *Early Fragments and Poems*, eds. Carol Landon and Jared Curtis (Ithaca: Cornell UP, 1997), p. 614.

¹³ William Wordsworth, *Translations of Chaucer and Virgil*, ed. Bruce E. Graver (Ithaca: Cornell UP, 1998) x.

¹⁴ Bruce E. Graver, 'Wordsworth's Georgic Beginnings', *Texas Studies in Literature and Language*, 33 (1991), 137-59; Bruce E. Graver, 'Duncan Wu's *Wordsworth's Reading: 1770-1799*', *RoN* 1 (Feb, 1996).

¹⁵ Virgil, *Eclagues; Georgics; Aeneid, Books I-VI*, tans. H. R. Fairclough (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1916, rev.

[哀れな死すべきものにとって、生涯の最も良い日は、つねに真っ先に逃げていく。あとには病氣と惨めな老年と苦しみがやってきて、冷厳な死が無慈悲に命を奪い取る。]¹⁶

ワーズワスはMS. 6, 5^rにおいて、行数にあまりこだわることなく、比較的自由に訳を試みているが、もっとも興味深いのはMS. 7, 8^rである。この草稿では、ドライデンよりも柔らかな訳を目指しながらも、「病」や「老い」や「労働」といったテーマを強調し、原文から逸脱して勝手に新たな詩行を書き加えているのだ。

Man's sweet and pleasant time his morn of Life
Flies first, and come diseases on, and age
Widow'd of joy and Labor—till at length
Beat by the inclement storms of cruel death
He finds a fearful refuge none knows where—
.....
At the sweet hour of prime the [] lark
Springs up awak'd by joy, and o'er the head
Of the tir'd labourer, like a mountain stream
Sings discontinuous all day long, and joy
Drops down with him at Evening to his nest.¹⁷

自由創作部分はさすがにワーズワス的な牧歌調に転じている感があるが、ウェルギリウスの翻訳部分は‘widow'd of’や‘inclement’などのやや不自然だったり、ラテン語風の表現が残存し、構文的にもぎこちない。

ところが、大陸徒歩旅行の見聞を素材にして 1793 年に出版した *Descriptive Sketches* になると、ワーズワスはこの箇所をある程度自分の言語として咀嚼していることに気付く。

Gay lark of hope thy silent song resume!
Fair smiling lights the purpled hills illumine!
Soft gales and dews of life's delicious morn,
And thou! lost fragrance of the heart return!
Soon flies the little time to man allow'd,
And tears before him travel like a cloud.
For come Diseases on, and Penury's rage,
Labour, and Pain, and Grief, and joyless age,
And Conscience dogging close his bleeding way
Cries out, and leads her Spectres to their prey,

1935) pp.158-59. ワーズワスが参照したドライデンの訳は以下の通り。

In Youth alone, unhappy Mortals live;
But, ah! the mighty Bliss is fugitive;
Disclour'd Sickness, anxious Labours come,
And Age, and Death's inexorable Doom. (108-11)

John Dryden, *The Works of John Dryden: Poem, The Works of Virgil in English 1967*, volume 5 (Berkeley: University of California Press, 1987), p.184.

¹⁶ ウェルギリウス 『牧歌 / 農耕詩』 小川正廣訳 (京都: 京都大学学術出版会, 2004).

¹⁷ Wordsworth, *Early Fragments and Poems*, p. 622.

'Till Hope-deserted, long in vain his breath
 Implores the dreadful untried sleep of Death. (*Descriptive Sketches*,
 632-43)¹⁸

英雄詩体二行連句 (heroic couplets) や擬人法など新古典主義的なレトリックを用いたこの詩は、18世紀的な叙景詩の末端に位置づけられる。表現においても、リズムにおいても依然としてぎこちなさが残るが、それでもワーズワスの自然感がすでに滲んでいり、フランス革命期の政治的イデオロギーを背後に潜ませている。スイスで出会った農民の貧しい生活と労働を語った直後に、ウェルギリウスの一節を組み込むことで、病、貧困、辛い労働、悲哀や死といったワーズワス流に切り取った『農耕詩』の主題を浮かび上がらせているのである。労働の価値と喜びが必ずしも最終的に保証されているとは言いきれないのが、政治的な意味をもつ。ワーズワスにとってウェルギリウスの『農耕詩』は最初から断片化されていたのであり、それは、生と労働の喜びが消滅した病、老齢、そして死が持ち込まれることで不安定になった牧歌の世界であり、政治的なメッセージを背負った *hard pastoral* もしくは反牧歌へと暗転した世界だったのである。

「病」、「老齢」、「死」というワーズワスの農耕詩のテーマは、『抒情民謡集』 (*Lyrical Ballads*) においても追究される。これまで『抒情民謡集』に収められた作品群は、「牧歌」という副題がつけられた 'Michael' をはじめとして、牧歌の伝統の中で吟味されてきた。瓦解してしまった田園生活を慨嘆するために、*hard pastoral* もしくは「反牧歌」の範疇に入れられてしまう傾向が強い¹⁹。だが、「楽園」を失い、「緑の言語」を剥奪された羊飼いの生活も、労働と「一生懸命に勤勉な生活」 ('a life of eager industry', 'Michael' 124) をテーマにしている限りにおいて、「農耕詩」という伝統の枠の中で考えることもできよう。1800年につけた序文でワーズワスが言う 'Low and rustic life' は、牧歌だけではなく、農耕も包摂しているのである²⁰。

ワーズワスの農耕詩としてもっとも特徴的なのが 'Simon Lee, the Old Huntsman' であろう。ワーズワスがウェルギリウスの『農耕詩』の中からはなかに無作為に抽出した「老年」、「病」、「困窮」、そして「死」といった主題が、「労働」という農耕詩の中心的主題と絡まりながら、この年老いぼれた猟犬係の姿に具現しているからだ。実際に猟犬係として地主に仕えていた Alfoxden に住む Christopher Tricky という名前の実在人物を素材にしているが、ワーズワスは名前を変え、妻の名前も聖書的な響きがある Ruth にし、さらに場所をウェールズの農地にすり替えることで虚構化していった²¹。それはサマヴィルが描いたような狩猟をテーマにした18世紀的な農耕詩ではなく、そうした健康的な狩りの風景が消滅してしまったいわば「反農耕詩」の世界である。解体されることで、ウェルギリウスの農耕詩が新たな精神を吹き込まれている。

サイモン・リーは、かつての主人から与えられた青く美しいお仕着せのコートを身にまもってはいるが、明らかに困窮している。年をとり、片目しか見えなくなり、若い頃の元気はない。たとえ狩猟をしようにも、主人は既に死んで屋敷には誰一人住んでいな

¹⁸ William Wordsworth, *Descriptive Sketches*, ed. Eric Birdsall (Ithaca: Cornell UP, 1984), p. 100.

¹⁹ Patterson, *Pastoral and Ideology*, pp. 280-81; Raymond Williams, *The Country and the City* (1973; London: Hogarth Press, 1985), p. 130.

²⁰ William Wordsworth, *Lyrical Ballads*, eds. R. L. Brett and A. R. Jones (1963; London: Routledge, 1988), p. 245.

²¹ ワーズワスが Tricky に出会ったのは 1797 年のことである。Thomas Poole、Coleridge、John Thelwall とともに散策中に彼と出くわしてその辺りの河川の流について尋ねたことが知られている。しかし、スパイ容疑をかけられることになったことはあっても、詩の中で語られているような逸話があったかどうかは定かではない。

いし、他の召使も、犬も、馬もみな死に絶えて、彼だけが生き残っているにすぎない。子供も身寄りもないサイモンは、足腰も弱り、踝が腫れ上がっているにもかかわらず、病弱で、ねじけたような痩身を酷使して田畑を耕す。

And he is lean and he is sick,
His little body's half awry;
His ankles they are swoln and thick;
His legs are thin and dry.
When he was young he little knew
Of husbandry or tillage;
And now he's forced to work, though weak,
—The weakest in the village. (33-40)²²

貧しさのためにサイモンとルースは毎日毎日働かざるをえないため、二人は「労働」に囚われた身の上であり、「村一番虚弱」なだけでなく、「貧民のなかでも最も貧しい」(the poorest of the poor, 60) ののである。壮健な頃に囲った耕地も今はもはや耕すことすらかなわない。

And though you with your utmost skill
From labour could not wean them,
Alas! 'tis very little, all
Which they can do between them. (53-56)

バラッド形式を用いていることは、無韻詩(ブランク・ヴァース)で書かれている18世紀の農耕詩からは大きく逸脱しているのだが、ワーズワスは「老齡」、「病」、「死」、「困窮」、「労働」というテーマを組み込むことで、彼なりの農耕詩を綴っているのである。

18世紀までの農耕詩に顕著な教訓もこの詩には付与されているが、しかしそれはあからさまなものでもない。サイモンとルースの老齡と困窮について語った詩人は、その後の語りを拒否して、読者に自ら「すべての中に話を / 見出す」(75-76)ように求める('It is no tale; but should you think, / Perhaps a tale you'll make it', 80-81)。詩の最後において、サイモンがいくらやっても切れない古い木の根を、語り手がつかはしを一振りして断ち切ったとき、サイモンが目には涙を浮かべて心底感謝感激する。

--I've heard of hearts unkind, kind deeds
With coldness still returning.
Alas! the gratitude of men
Has oftener left me mourning. (101-04)

'men'と複数形で書かれた人間が表す感謝の念に触れて語り手が嘆くのは、サイモンの老いた姿だけではないであろう。冷淡にならざるを得なくなった人間社会の傾向全体を批判しているように思う。David Simpsonが指摘するように、それは強いていえば地主と召使が協働する狩猟に象徴されるジェントリーの伝統的生活様式や古い道徳経済が減びていく状況をロマン主義的想像力によって「転置」(displace)していると読めなくも

²² William Wordsworth, *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*, eds. James Butler and Karen Green (Ithaca: Cornell UP, 1992), p. 66.

ないが²³、一方でフランス革命を支えた博愛の精神、イギリスではゴドウィンが理想化した普遍的な仁愛といった理想的な美德が、有名無実なもので、結局のところ共同体の崩壊、政治的混乱そして殺戮しか生み出さなかったことに対する自責の念を含めた痛切な批判もこめられていると言えはしないだろうか？冷たく突き放された読者が独力で導きださねばならない「教訓」は、意味が開放されたままだ。

「サイモン・リー」と同じように「困窮」や「労働」をテーマにした詩は『抒情民謡集』にはいくつかある。‘The Last of the Flock’と‘Michael, a Pastoral Poem’はいずれも、いわゆる「囲い込み」やその他の農業革新と産業構造の変革によって、犠牲にならざるをえなくなった農民たちの姿を描く。「最後の羊」は、明らかに18世紀的な農耕詩とは異質な境遇が示される。精魂こめて毎年羊を育て50匹にも増やした羊飼いが語るのは、ウェルギリウスが3巻でしたような家畜の増殖方法でもないし、John Dyerが*The Fleece* (1757)で描いた世界を制したイギリスの羊毛産業の活況でもない。生計が成り立たず、教区の救貧を求めても拒否され、家族を養うために羊を一匹ずつ売らざるをえなくなってしまった哀れな自分の姿なのである。‘Six children, Sir! had I to feed, / Hard labour in a time of need!’ (41-42)と嘆く羊飼いは、心も体も休まる暇がない。疲れをおして一心不乱に働こうにも、生活は楽にならず最後の一匹まで羊を売り払う惨めな状況なのだ。

Another still! and still another!
A little lamb, and then its mother!
It was a vein that never stopped,
Like blood-drops from my heart they dropped. (61-64)

「マイケル、ひとつの牧歌詩」が、アイロニカルな反牧歌として都市経済と「囲い込み」による旧農村共同体の構造を破壊してしまったことを批判しているとすれば、「最後の羊」は羊を飼育することさえできず、農業労働に喜びも自負の念も見出せなくなってしまった社会状況へのやる方ない不満がこめられている。農耕も羊毛も不可能な社会では、農耕詩は存立できない。

そうした古典的な農耕詩に背中を向けたような悲観主義は、ワーズワスの『廃屋』や、そしてそれを包摂する『逍遙』(*The Excursion*, 1814)においてもみられる。Georgic *Modernity and British Romanticism* (2004)において、Kevis Goodmanが18世紀的な農耕詩の終章として『逍遙』を議論したのは正当だが、新歴史主義的な解釈にこだわる彼女はこの詩が明らかに掲げている「反農耕詩」的なメッセージを素直に受け取らないところがよくない²⁴。「詩人」(the Poet)と「流離人」(the Wanderer)が目撃するのは、「廃屋」が象徴する革命と戦争によって崩れ落ちた農村共同体である。夫を兵役に取られ、やがては妻も子供も死に絶え住人を失った「廃屋」とフランス革命への幻滅から厭世家と化した「隠遁者」(the Solitary)を中心に語りを展開する『逍遙』は、戦争や殺戮によって従来のように叙事詩も牧歌も、さらには農耕詩さえも書けなくなった時代の産物なのである。たしかに、ウェルギリウスも、18世紀のイギリス農耕詩も、戦争によって荒廃した農業を扱うが、主眼はその復興であり、失意の状況ではない。『逍遙』第7巻に登場する農民は「陽気」で、「健康」で、「自由」と「希望」を体現した人物として描かれ、「隠遁者」を失意の淵から引きずりあげる役割を担うが(*The Excursion*, 7: 550-63)、

²³ David Simpson, *Wordsworth's Historical Imagination: The Poetry of Displacement* (New York: Methuen, 1987), p. 157.

²⁴ Kevis Goodman, *Georgic Modernity and British Romanticism* (Cambridge: Cambridge UP, 2004), Chapter 4.

『逍遙』の大半を占めるのは、農村共同体が物理的にも精神的にも疲弊し、労働に意味を見出し、将来の希望を見出すことさえ難しい暗澹たる状況である。強調しすぎてもいけないが、囲い込みによる労働人口の移動、不作や物価変動による貧困化に加えて、税金や徴兵などによる人民の疲弊、長引くナポレオン戦争による経済的圧迫などにより、当時のイギリスの農村経済はかなり動揺していたことは歴史的事実である。ワーズワスは農耕詩の要素を借用して、労働の意味と価値が大きく混乱していった現実に警鐘を鳴らそうとしていたのである。人々の生活の糧、幸福、権利を剥奪することによって国が繁栄すると唱える経済学者たちを第8巻でワーズワスは糾弾しているが (*The Excursion*, 8: 280-85)、とくに工場の設立と子供の労働という社会問題を取り上げる。あたたかな家庭の幸せさえもが、工場や都市産業の出現によって、突き崩されたとワーズワスは批判する。機械的な労働を強いる工場という牢獄に、肉体だけではなく、精神までもが閉じ込められてしまうことで、人間の有機的な生存が倒壊してしまっている状況を嘆くのである。

Oh, banish far such wisdom as condemns
A native Briton to these inward chains,
Fixed in his soul, so early and so deep;
Without his own consent, or knowledge, fixed!
He is a slave to whom release comes not,
And cannot come. The boy, where'er he turns,
Is still a prisoner. . . . (*The Excursions*, 8: 297-303)

工場法の争点となった子供の労働時間の問題に言及していることはあきらかだが、農耕詩との関連で考えると、「労働」が自然から機械に囲まれた工場に置換され、そこには「喜び」が欠落していることは深刻な意味をもつ。顔色が悪く、健康を損なうまでに機械を前にして働く少年は、田畑を耕す父親の周りで自由に遊び戯れる子供ではなく、「囚人」でしかないのである。ウェルギリウスや18世紀の英国詩人たちが描いてきた農耕の喜びや田園の賛美、さらには国威発揚という農耕詩の隠れた意図は、ワーズワスにとっては遠い現実であった。安息日さえも守ることがない田園の生活は、都会の人ごみからの逃避所にさえならない事態が生じていたのである (*The Excursion*, 8: 239-51)。

こうした反農耕詩的な記述はワーズワスだけの特権ではない。William Cobbettの*Rural Rides*は、いわば彼自身の検証に基づいた反農耕詩の散文版であり、物価高と揺れ動く穀物法のために困窮していく農民の姿を詳述している。だが、ワーズワスが「サイモン・リー」や「最後の羊」を書いたとき念頭にあったのは、Mary Jacobusの指摘するとおりBurnsの‘Man was Made to Mourn: A Dirge’であろう²⁵。自ら鋤や鍬を持ち、ウェルギリウスの『農耕詩』を讃えるRobert Burnsもまた、極限まで追い詰められていく農民の姿を捉え、その辛苦を代弁する。

When chill November's surly blast
Made fields and forests bare,
One ev'ning, as I wand' red forth
Along the banks of Aire,
I spy'd a man, whose aged step

²⁵ Mary Jacobus, *Tradition and Experiment in Wordsworth's Lyrical Ballads (1798)* (Oxford: Clarendon, 1976), pp. 204-07.

Seem'd weary, worn with care,
His face was furrow'd o'er with years,
And hoary was his hair.

....

See yonder poor, o'erlabour'd wigh,
So abject, mean, and vile,
Who begs a brother of the earth
To give him leave to toil;
And see his lordly *fellow-worm*
The poor petition spurn,
Unmindful, tho' a weeping wife
And helpless offspring mourn. (1-8, 57-64)²⁶

仕事を求めても何も与えられることがない男は、惨めに、絶望を胸にかかえて、嘆き悲しむ妻と子供たちを眺めているしかないのである。嘆くことしか術のない労働者の歌は、「挽歌」あるいは「哀歌」なのだが、それは生活のために辛苦をこらえて労働する権利さえ剥奪されてしまった社会の農耕詩の形態と言えないだろうか？

バーンズの詩は貧しい農夫に対する視線が低く、それゆえに彼らの姿は等身大に浮かび上がってくる。それに対してワーズワスの詩を振り返れば、農民たちと語り手との間にはれっきとした距離が残っているのは否めない。農民を崇高な存在に変えるロマン主義のイデオロギーをそこに認めないわけにはいかないだろう。‘Resolution and Independence’の蛭取りの老人や‘Solitary Reaper’の乙女はとくに顕著な例だろう。「サイモン・リー」や「最後の羊」における農民と語り手の距離は、それほどではないにしろ、そこにはロマン主義的想像力が働いているし、彼らも「等身大」の姿とは言い切れない。

「なんとなく」ワーズワス的なジョージアン詩人たちも、ワーズワスのロマン主義的な自然詩の傾向として、「距離」を想定しているように思われる。ジョージアン詩人の一人Lascelles Abercrombieはロマン主義について議論する中で、対象物との「距離感」(the ‘feeling of distance’) を重視し、そこに内的な要素が付加されたときにロマン主義的な詩が生まれると論じる²⁷。都会と田舎という対比の中で、鳥や動物、花々や山や川のみならず農夫たちも自然の中に含まれるが、それをロマン主義的にしているのは対象物との「距離」なのであり、それが「崇高さ」(sublimity) を生んでいるのだと、John Gregorson CampbellやJ. F. Campbellらのスコットランドの迷信や民話についての考察を引き合いに出しながら論じる²⁸。

結果論として、ロマン主義への反逆はモダニストたちの勲章になってしまうが、ジョージアン詩人たちは、それでもなお牧歌的なワーズワスに対して彼らなりの自然詩の構築しようと試みていることも否定できない。そして、ワーズワスがフランス革命以後の激動の歴史的体験から農耕詩を組み替えていったように、彼らも第一次世界大戦という劇的な歴史変動を経験することで、彼らなりの自然詩を形成することにある程度成功したように思う。もちろん、ウェルギリウスの農耕詩と同じように、ジョージアン詩には

²⁶ Robert Burns, *The Canongate Burns*, eds. Andrew Noble and Patrick Scott Hogg (Edinburgh: Canongate Books, 2001), pp. 108-09.

²⁷ Lascelles Abercrombie, *Romanticism* (1926; London: High Hill Books, 1963), p.43.

²⁸ Abercrombie, *Romanticism*, pp. 97-98. See also John Gregorson Campbell's *Superstitions of the Highlands and Islands of Scotland* and J. F. Campbell's *Popular Tales of the Western Highlands*.

愛国主義的、国威発揚としての意図はその構想段階から存在することも事実だ。編者したマーシュは当時Winston Churchill指揮下の海軍省で働く官僚であり、ドイツ軍に対抗して海軍増強を図っている時期だったから、コテッジ、家具、苔むす納屋、そしてスポーツにいたるまでイギリス的な田園生活の描写は、イギリス的なものに対するノスタルジアと愛国心を掻き立てるといふ隠れた戦略的意図を担っていた²⁹。だが、同時に彼らの自然風景には、時折、戦争によって陰を帯びていった暗い実存的な不安がちらちらと顔をのぞかせている。

ブランデンは *Nature in English Literature* (1929)において、英詩の自然観を概観しながらも、Stephen Duck や Robert Bloomfield の地に足のついた農耕詩を讃え、静かなイギリスの自然を詩にスケッチする一方で、‘The Waggoner’や‘The Shepherd’においては、困窮し、存在の不安を抱えた農民の姿を描写していくことも忘れていない。「羊飼い」の主人公は、白髪が逆立ち、風雨にさらされて岩のようにになった顔を夜の闇に向け、その遠く向こうにかすかに見える光を見つめながら、過去に羊を追った大地を思い起こし、そしてやがて近づいて来る死の姿を瞑想するのである。

The stubble browsing comes, and grand and grave
Autumn in shadow swathes the rolling weald,
The blue smoke curls with mocking stealth afield,
And far-off lights, like wild eyes in a cave,
Stare at the shepherd on the bleaching grounds.
Deeply he broods on the dark tide of change,
And starts when echo sharp and sly and strange
To his gap-stopping from the sear wood sounds.
His very sheep-bells seem to bode him ill
And starling whirlwinds strike his bosom chill.

Then whispering all his eighty years draw nigh,
And mutter like an Advent wind, and grieve
At perished summer, bid him take his leave
Of toil and take some comfort ere he die.
The hounded leaf has found a tongue to warn
How fierce the fang of winter, the lead rain
Brings him old pictures of the drowning plain,
When even his dog sulks loath to face the morn.
The sun drops cold in a watery cloud, the briars
Like starved arms snatch at his withered fires.³⁰

キーツの‘To Autumn’の第3連を偲ばせる夕暮れの風景だが、彼が鳴らす鐘の音は死を迎える前奏曲のようである。オックスフォードで古典を学んだ彼にとっては、ウェルギリウス以来の農耕詩や牧歌の伝統は親しみやすいものであったし、John Clare をこよなく愛した彼にとっては耕されたイギリスの田園は心休まる風景であり、哲学的省察を深める思索の場であったのかもしれない。しかし、冬が近づく秋の夜闇に死をみつめる羊飼いの眼差しの先には、田園風景の裏に隠された陰惨な戦場と重苦しい存在の不安が横た

²⁹ James Reeves, Introduction to *Georgian Poetry*, ed. James Reeves (Harmondsworth: Penguin, 1962), p. xv.

³⁰ Edmund Blunden, *The Shepherd and Other Poems of Peace and War* (n.p.: Richard Cobden-Sanderson, 1922), pp. 11-12.

わっている。

シーグフリード・サスーンの「年老いた猟犬係」を所収している *The Old Huntsman and Other Poems* は、彼が初めて世に出した本格的詩集ゆえに、敬愛する Thomas Hardy に捧げられていて、確かにハーディーの影響が自然描写や言葉遣いのそこかしこに垣間見える。だが、‘The Old Huntsman’はワーズワスのな農耕詩の主題を Browning 流の劇的独白で追求したものに思われる。この「年老いた猟犬係」は、騙されて貯蓄をすべてなくし、やるせない怒りを吐露し続ける。寡黙なサイモンとは饒舌さと怒りにおいて異質だが、働くこともなく、ただひたすら死を待つだけの点で同じ境遇だ。ブランデンの羊飼いは静謐な闇で過去と死を見つめるが、サスーンの猟犬係は昔夢見た狩りの風景を思い起こす。それは陽気で愉快的な狩りではない。獰猛に血を求め、子馬は生垣を飛び越えられず、果てには溝に乗り手ともども落っこちる。

I used to dream of Hell when I was first
Promoted to a huntsman's job, and scent
Was rotten, and all the foxes disappeared,
And hounds were short of blood; and officers
From barracks over-rode 'em all day long
On weedy, whistling nags that knocked a hole
In every fence; good sportsmen to a man
And brigadiers by now, but dreadful hard
On a young huntsman keen to show some sport.

Ay, Hell was thick with captains, and I rode
The lumbering brute that's beat in half a mile,
And blunders into every blind old ditch.
Hell was the coldest scent in land I've known,
And both my whips were always lost, and hounds
Would never get their heads down; and a man
On a great yawning chestnut trying to cast 'em
While I was in a corner pounded by
The ugliest hog-backed stile you've clapped your eyes on.³¹

サスーンが「地獄」と呼ぶ陰惨な狩りの風景は、彼が経験した狩りというよりも、彼が見た第一次世界大戦の戦場の寓喩であろう。狩りを含めたスポーツのシーンは、伝統的に戦争の比喩として通用されている。

もともとラファエロ前派から出発し、乗馬やクリケットをこよなく愛した野心家のサスーンは、1814年に志願兵として入隊し、翌年将校としてフランスの前線に送られる。その後はイギリスと前線を往復することになる。1916年の8月に塹壕熱により傷病兵として帰還するが、翌年に2月には激しい戦闘があったソンムに送られる。肩を負傷し再び傷病兵として帰還し、1818年の2月にもう一度フランスに送られるまでの間に、『年老いた猟犬係とその他の詩歌集』を出版するのである。「年老いた猟犬係」が見る地獄は、夢として描かれているが、それはオーウェンが‘Strange Meeting’で見せたように、美しいイギリスの田園風景とははるかにかけ離れた凄惨な戦場を寓話的に描くための装置なのだ。詩集には抒情詩的な美しさをもつ田園風景を描いたものも多いが、しかしその裏には凄絶な戦闘の中で非業の死を遂げた屍が累々と積み重なっていく風景が裏

³¹ Siegfried Sassoon, *The Old Huntsman and Other Poems* (1917; New York: E. P. Dutton, 1920), pp. 5-6.

に広がっているのである。帰還中の 1816 年 8 月に、サスーンはレディ・オトリーン・モレルと知り合い、彼女を通じてバートランドラッセルを初めとする反戦論者と交流を結んだ。草光俊雄氏は、とくに H. G. Wells からは大きな啓示を受けていることを指摘している。

今やこの戦争は群集が殺到し多方面に顔を向けた破滅と同様に、帝国を打ち砕き世界を荒廃させる戦争である。意味の無い戦争、魂を失った戦争である。一貫性の無い戦闘であり破壊である。吾ら人類の馬鹿さ加減と無能力の巨大で悲劇的な様相を露呈している。³²

志願兵として何度も前線に立ち、塹壕の中でイギリスの田園風景を思い描きながら、サスーンは戦争の悲惨さを風景に塗りこめている。戦死ワーズワスの農耕詩から、愉快で健康的な農耕の風景が消滅していくように、サスーンの詩は戦争によって風景が暗転してしまった農耕詩なのである。そこには、大きな存在の不安が横たわっているように思う。

ワーズワスは常に悲観的な自然ばかりを謳っていたわけではないし、ジョージアン詩人たちも実存的な不安を風景にいつも忍ばせていたわけではない。「ティンターン僧院」や『序曲』第 8 巻に代表されるように、失意の人間を慰撫し、再生させてくれるエコロジカルな自然をワーズワスは描き続けたし、不安と焦燥をなだめ、傷つきバラバラになった社会をつなぎ合わせてくれる田園風景をジョージアン詩人たちは知っていた。

しかし、それは牧歌の様式を踏襲することで可能であったと言えはしまいか。19 世紀以後も農業技術は確実に改良されていったし、ブランデンがこよなく愛した農民詩人 Robert Bloomfield や John Clare たちの詩行は、ウェルギリウスや 18 世紀の農耕詩ほど長くはないが、田畑で土を耕し、穀物を収穫する労働の喜びを謳う点で、正統な農耕詩の継承者と言えよう。だが、その一方で農村生活の経済的荒廃が顕著に進んでいったことも事実である。ワーズワスは「病」、「老い」、「困窮」、「悲嘆」、そして「死」というテーマをウェルギリウスの『農耕詩』から抽出することで、牧歌の裏で瓦解していく農業共同体を描いた。それは、解体しながらも、新たな社会環境の中で意味をずらしながら、再構築していった農耕詩である。「サイモン・リー」はそうしたいってみれば「脱解体」されたワーズワス流ロマン主義農耕詩の中心に位置付けることができよう。そして、その系譜は第一次世界大戦という環境において農耕詩の意味を新たに組み換えようとしたジョージアン詩にも、形を変えながら流れ続けているのである³³。

³² 草光俊雄 『明け方のホルン』（東京：小沢書店、1997）、p. 126 に引用・訳。

³³ さらに言えば、ウェールズの不条理な原自然的風景に佇む R. S. Thomas の Iago Prytherch は、サイモン・リーの曾孫であり、サスーンの年老いた獵犬係の息子になろう。これについては拙稿 「R. S. Thomas のウェールズ農耕詩～イアゴ・プリサーチが歩き続ける不条理な原自然的風景」 放送大学研究年報, 22 (2005): 93-100.